

第四章 人々の認識と生態学的知見からみた樹木

第II部の冒頭に、削りかけを構成する基本的要件として、樹木であること、選択された樹種であること、人為を加えることの三点を挙げた。前章までは、削りかけが樹木であること——樹木をめぐる観念や具体が削りかけ習俗の重要な構成要素であること——を論じてきた。そのことは三章でみたように、特定の樹種を選択という行為を通してもっとも明確に顕われていると言ってよい。そこで四章・五章では、削りかけというモノ、コトを成り立たせる要素として挙げた樹種を選択について、さらに詳しく論じていきたい。

なぜ特定の樹種が選ばれるのかという問いは、なぜ、どういった背景で削りかけという存在がそこに生みだされるのかという問いでもある。その問いは、ここでも本質論的なものではありえない。つまり、選択される樹木の聖性、呪性といったものがそこに存在するから選ばれるとみるのではなく、それは関係性のなかにおいて選択されるものと捉えたい。その関係性とは、ここでは人と樹木（自然）との関わりである。したがって、その関わり方の在り方を明らかにすることが本章以下の課題となる。そうした関係性を浮きあがらせることによって明らかにしうるのは、「原初」の時ににおいてなぜその樹種が選び採られたか、ではない。なぜ、どういった関わりの中にあつて、いまその樹木が選ばれているのか、あるいは、選ばれ続けているのか、である。

そこで四章ではとくに生態学的な視点を援用しながら、人と樹木とのどういった具体的な関わりの中かで特定の樹種が選ばれるのかをみていく。五章では樹木をめぐる民俗的な事象——樹木の名づけの民俗を取りあげ、検証したい。名づけという行為、また、その名前そのものが、人々の心意あるいは観念世界の表象であると捉え、その検討を通して、より抽象的あるいは無意識的な関わり方の在り方を描くことを試みたいのである。

四章では樹種選択の背後に見いだすことのできる人と樹木との関わりを示す。II—一章で先行研究を挙げて示したように、その関わりは、人間・樹木の双方が主体的な存在とし

て関わるような在り方として描かれなければならない。そこでまず、第一節で人間から樹木に向けられる視点を検討する。ここでは、フィールドにおける語りを通して、人々の樹木に対する認識を導きだすことを試みる。ただしここで扱うのは樹木に対する抽象的な認識論ではない。むしろ具体的で体系化されていない、樹木に対する即物的な語りの断片である。一方、樹木の側の「主体性」を描くには、生態学的な視点をを用いることが有効であろう。そこで第二節では生態学的視点を援用しながら、できる限り樹木からの視点到に接近してみたい。第三節では両者の視点を重ねあわせることでみえてくる関わり方の在り方を描き、そうしたなかにあつていかにして樹種が選択されるのかを論じていく。

なお、これまで確認してきた通り、削りかけの材となる樹種は、落葉広葉樹群（小正月や春彼岸の削りかけ）と針葉樹群（紀伊山地のケズリバナ）に大別される。両者は樹木の物理的、生態学的性質の点で大きく異なっており、その差異は造形の違いとして明確に顕われている。このうち本研究では、とくに地域的広がりがあり、検証材料の豊富な小正月や春彼岸の削りかけにみられる樹種群を中心に扱うことで、より具体的な検証を行なうことを試みたい。ただし必要な個所では紀伊山地のケズリバナの材についても言及することにする。

ところで、削りかけの材として選択されるような樹種群、あるいはそれとよく似た生態学的・物質的性質を持つ樹種群は、とくに小正月のそのほかの儀礼においてもしばしば用いられることがわかっている。たとえば、マユダマやダンゴギなどと呼ばれ、木に餅やダンゴを飾りつける習俗が列島上に広く見出せるが、ここで選択される木は、東日本ではミズキ科の樹木——ミズキが圧倒的だがヤマボウシなども散見される——がもっとも広くみられ、ほかにヤナギ類など、削りかけに選ばれる樹木と重なりあうものが少なくない。そこで本章以下では削りかけに用いられる樹種をめぐる諸事象を中心に扱いながらも、より詳細に論じるために、小正月にみられるそのほかのツクリモノに用いられる樹種にも視野を広げて検討していきたい。

第一節 人々の樹木認識 ——フィールドワークから

ヌルデ、ヤナギ類、ニワトコ、ミズキ、イヌビワ、アカメガシワ、ホオノキ、クルミ類、キブシ、コシアブラ、これらの樹木を人々はどのようなものとして捉えてきたのだろうか。そうした認識は直接の聞き書きによって知ることがもっとも有効である。筆者はフィールドワークのなかで、樹木に対する認識についても尋ねるよう心がけてきた。その聞き書き資料のなかから、樹木の特徴として語られる事柄を列挙したのが表 a である。これらは、その樹種に削りかけのほかに用途はあるか、どういった場所に生育する木か、どのような特徴を持っているのかなどといった質問に対する応えであるが、結論から言って、これらの樹種群に対する認識には高い共通性がみられるとあってよい。

こうした認識は人々の具体的観察に基礎づけられるものであり、当然、次節で確認するような生態学的知見とも大幅に合致する。ただし、その樹木を認識する際に、とくにどのような点に注目しているのかを知ることが、ここでは重要である。たとえばヌルデは、表皮を傷つけると白い樹液を生じる性質があり、それがヌルデの特別視を形作る要素のひとつであるとも指摘されてきた〔たとえば 渡邊 二〇〇七〕。しかし、削りかけ材に限って言えば、その点が言及されることはほとんどなく、むしろ白さや柔らかさが語られる。こうした人々の語りは、なぜその樹木なのかといったことを考える際の一助となるだろう。以下、先行報告も加えながら、人々の語りを通して樹木に対する認識をみていくことにしたい。

(1) 材に対する認識とその周辺

はじめに材についての語りを挙げておく。材の評価としては、白い、柔らかい、あるいは水分が多いといったものが目立つ。白さはミズキやヌルデ、コシアブラなどについて語られている。事例 27 の東秩父村ではミズキやヌルデのほか、地域によってマメブシ（和名キブシ）なども使われるが、礪田博安さん（昭和一〇年生まれ）によればそのなかで木肌がもっとも白いのがミズキであり、事実、その差は歴然としている（写真 1）。柔らかい、

表a 人々の樹木の認識——聞き書きより

No.	地域	ツクリモノの名称	樹種名 <方言名>	適材	樹木に対する認識		伐採にまつわる 民俗	現状	調査年
					生育場所と状況	木の性質と利用			
1	角館町 雲然	ボンデンコ	コシアブラ (コシヤバラ)	若木。 直径2 ⁵ / ₈	山	白い木	秋、降雪前に伐る	最近あまり見かけない。またあっても、製作者いないため木が太くなってしまっている	07年
2	秋田県 秋田市 太平黒沢	ホンデキ棒	コシアブラ ヤマウルシも ※材なければ ホオノキでも	—	コシアブラ：雑木林、植林の杉山にも。里山に結構ある ヤマウルシ：山とは言えない平地の近く。居住地の近辺。平たい場所、日向にある	白く、柔らかい木。いずれも価値のない木(コシアブラの芽を食べることはない)生活圏内で入手しやすい	秋、降雪前に伐る。価値のない木なのでどこでも伐採可能	—	07年
3	秋田県 西木村 松木内	男根 カンデヤッコ (マユダマの木)	オニグルミ (クルミ) ホオノキ ミズキ(ミズキ・カギビコ)	5~6年生の木の幹 木の幹 —	たくさん生えている 探せばあちこちにあるが毎年行事に使うので老木はあまりない あまりない。雑木の中ではなく、木のない場所、平地、日当たりの比較的良好い場所にある	子どもの遊びでスカンゴ(イタドリ)を塩漬けするための器を作る 成長はあまり早くない。普段あまり使うことはない。老木は道具の柄などに使う 子どもたちがミズキをカギにして引っぱり張って遊んだ	製作の2週間位前に伐って乾燥させる — —	毎年行事に使うので老木はあまりない	06年
4	久慈市山根 端神	イト (花)	オニグルミ (クルミ) ミズキ	1~2年生の若木の幹 —	たくさん生えている —	実は食用にした 普段は何も使わない	12月の降雪前などに伐りにいく適材は事前に見立てておき、どこからでも採ってくる。	— —	08年
5	久慈市宇部町 滝の沢	イト/ アズキ・マメ	オニグルミ (クルミ)	1寸位の太さの若木の幹	川端など近くに生えている	実は食用にした。材は乾燥させないで使う	自分の家の木でなくとも手ごろなものを伐る	—	08年
6	岩手県 川井村小国	ユウガオ	オニグルミ (ホンダマ)	3~4年生の若木の枝	川端によく生えている。	材は「シナミ」があり柔らかい。軽くて丈夫なので乾燥させて道具の柄にした。実は10年位すると成るので食用にする。成長が早い木で、伐るとかえって更新されてよい	12日は山の神の日で木を伐つてはいけないのでそれ以前がいい日にワカギムカエする。できただけ自分の山で伐る。伐つても更新するのでむしろ伐ったほうがよい	—	06年
7	一関市花泉町 老松	ヒガンバナ (奉使岸/ アワボ(小正月)	ヌルデ (カヅノキ)	直径2~3 ⁵ / ₈	山。一か所にかたまってる生えない	普段はあまり使わない木。芯があるので、アワボを挿すのが楽	アワボは1月14日にカヅノギムゲー(カヅノキ迎え)する。乾燥させないで削る	山にはあるが数は多くなく入手困難になりつつある	06年
8	一関市川崎町 門崎	ケズリバナ/ ヒガンバナ	ニワトコ (ニワトク)	1年生	道路つぶらにある。場所を嫌わない	伐って放置しておいても芽がでてくる生命力の強い木。用材にならない木で、将来性のない木。芽は食べる。	用材にならないので誰がとつてもよく、かえって切ってもらうと丁度よい。生のまま削る	—	06年
9	登米市津山町 柳津	ヒガンバナ	(ヤナギ)	直径2.5 ⁵ / ₈	開田した場所や河川のふちなどに多い	柔らかく粘りがある。節がなく、一年ですーツと伸びる(節と節の間を削る)	製作の20日位前に伐る	—	06年
10	登米市登米町 寺池	ヒガンバナ	(ヤナギ)	親指程の太さ 2~3年生	休耕田などに生える。昔は北上川のふちにくたくさんあった	柔らかく削りやすい	製作の10~2週間位前に伐る	今は成木になってしまっている	06年

11	宮城県	仙台市岩切	ケズリバナ	コシアブラ	4年生位	日向日陰関係なく、高い所にある	柔らかく乾いても割れず、節がないため削りやすい。白い。芯がある木で、ここにツゲを挿すの必ず芯のある木でないといけない	秋、降雪前に伐る	—	05年
12		山北町雷	ホウダル	ホオノキ	直径1~2寸	山中にたくさんある	身近な木。柔らかい木なので何にもならない木だが、祝いの木らしい。かつては正月用の火箸を作った。芯がある	秋、降雪前に採っておき12月27日の松迎えに家の中に迎える(※かつては小正月)	—	03 04年
13	新潟県	山北町山熊田	アワの木/ アワのホウダラ	ホオノキ	直径5~6寸	伐ると根本からたくさん生えてくる	薪にするとすぐ燃え尽きるので喜ばしくない。葉は利用した。材が軽いため、「アワの木」は後に鎌の柄に転用。あまり枝が出ず、すーっと伸びる木	—	—	04年
14		山北町府屋	カタナ (サイノカミ)	ミズキ (ダンゴノキ)	細い木を使用	山中にびっちら生える。腕の太さまで成長する	柔らかく、白い。団子の木にも用いる	—	—	03年
15		温海町関川	ケズリカケ	ホオノキ	—	日向日陰関係なく肥沃な地に生える。群生したがる	成長が早い。材は織機や家具に使用する重要な木。葉は塩蔵し、物を包むのに重宝した	迎えものの木だけはどこで伐ってもよい。生息場所を覚えておき伐った	—	03年
			ダンゴギ	ミズキ (ダンゴノキ)	—	—	何にも使えない、ナメコもでない。乾かない、死なない木だから薪にもできない。団子木にして飾っておいても葉が出てくる	迎えものの木だけはどこで伐ってもよい	—	
16		立川町肝煎	サエノカミの ヒトガタ	(ヤナギ)	—	川べりにはどこでもある	手に入りやすい。柔らかく削りやすい	—	—	03年
17	山形県	羽黒町手向	ケンケロ (サイノカミ)	ホオノキ	—	山中にたくさんある	ケンケロ以外には使用しない。ただし葉は物を包むのに用いる	秋のうちに伐る	—	04年
18		寒河江市平塩	男根様/ 御霊神様	(マツ)	直径5寸程の 若木の幹	スノーモービルで10分ぐらいの山。雑木が多いと育たず、峰にのみ生える。松は土をきれいにする自然に出てくるので開墾するとたくさん生える	生長が早いわけではないが、一年で一節伸びる。この一節から男根様二本作る	当日朝に伐るかつては門松を利用	数が少なくなっており、来年はナラにするかという声も聞かれる	04年
19		米沢市笹野	ケズリバナ	コシアブラ (アブラッコ)	直径2~3寸	雑木林の中、なだらから湿度の高い山、北斜面に生える。太陽に弱くすぐ日に焼けて木の色が悪くなるし、風に当たると木が硬くなるため、ほかの雑木と一緒に育つたものでないかと駄目	秋一番に紅葉する。何の役にも立たない木として笹野町以外には使わない。炭にもならない。山主も邪魔者扱いした。芯のある木	秋、降雪前に伐る どここの山でも伐採可能	—	03年
20		六合村 荷付場	ハナ	ヌルデ (カツボク)	10年生位から 使える	崩れたような土手に一番に生える。深い木立では他の木に負ける	柔らかいので普段は使わない。建材にもならない。成長が早い。乾燥させると硬くなるので生のまま削る	※共同で製作するので、正月明けの吉日に共同で伐採する	—	05年
21	群馬県	六合村入山	ハナ	ヌルデ (カツボク)	15~20年生	峰ではなく窪地、一番悪い所に生える。日当たりよい場所に生える。太くなる自然に枯れ、また新しく育つ	この他には使わない。山小屋で薪にする程度だが薪としてもよくない。炭にするには柔らかすぎて駄目	1月6日のムイカヤマ(初仕事)で伐る。村の80%が国有林なのでこっそり採ってくる	—	05年
22		六合村小雨	ハナ	?	1年生	湿地で日陰の山、半分ぐらい日の当たるところにある。灌木のように低く、株木になる	柔らかい。節があるが、一年で伸びた部分(節と節の間)を削る。薪にはならない	1月2日のヤマイリで伐る	昔は炭焼きで大きい木を伐ったのでたくさんあったが、今は大きな木の下になりに育たない	05年
23		片品村 御座入	ハナ	ミズキ (ミズブサ)	直径8~9寸	—	やっこく削りやすい木。水伏の木という意味で屋根にあげる。マエダマの木にもする。	—	—	05年

調査年	地域	ツクリモノの名称	樹種名 <方言名>	適材	樹木に対する認識		伐採にまつわる 民俗	現状	
					生育場所と状況	木の性質と利用			
24	群馬県 群馬県	ハナ	ミズキ、ミズブサ、アカボヤ、カギンマ	—	山中にたくさんある	赤いのでミズキを伐ることをアカボヤ伐りといった。子どもの頃、マユダマの枝(=ミズブサ)で引っ張りっこして遊んだ。	—	05年	
25		ハナ (マユダマの木・タワラ)	オニグルミ(ケルミ) ミズキ(ミズブサ)	直径2~2.5センチ 細い部分を使用	日向の乾いた土地、山中にいくらかもある いくらかでもあった。林の中など日当たりの悪い場所の木が柔らかくてよい。スギの中の木などがよい。	—	1月2日の仕事始めで伐る 1月2日の仕事始めで伐る 1月2日の仕事始めで伐る	— — 今は昔ほどはない	05年 05年 05年
26	埼玉県	アワボほか (※一部 削りかけ)	ヌルデ(オツカド)	直径3センチ	ヤクザな木で簡単に生える。繁殖率の高い木。	加工しやすい木。ただ燃料にすればはねて始末が悪い。ナラやクヌギの邪魔になるのであるべく絶やすようにしたい。芯のある木	吉日に伐る	—	03年
27		ハナ	ミズキ	直径3センチ	杉林など。日陰でいくらか日の当たるところのものがよい	木肌が一番白く、柔らかく削りやすい。1年で1節スーッと伸びる成長の早い木で節と節の間隔が広い(この間を削る)。何にもならない役に立たない木。ケチな戻しかでない。棟上式の時に棟木に縛る。火除の、祝いもんの木。芯のある木	七草頃に伐る よい木は夏の間に捜しておく	炭焼きをしていたころは山がきれいだったので探しやすかったが今は大変	03年 04年
28	埼玉県	16段のハナ	ニフトコ(ニワツク)	1年生	山中なら日陰山に多い。林道の道端など新しい土を反した所に一番に生えるので新造した林道脇等にくさくさがある。一定の大きさになったら枯れる	成長が早い。水分をたっぷり含んだ木	三ヶ日すぎに伐って10日ほど乾燥させる	—	04年
29		12段のハナ カユカキボウ (削りかけなし)	ニフトコ(ニワツク) ヌルデ(オツカド)	1年生 直径7センチ	昔は畑に植えて「仕立てた」 昔は畑の土手(際)などに植えておいた 路端に生える木で深山にははない	一番削りやすい 小正月しか使わない 真っ白な木、紅葉が美しい木	— —	今はいい木がない	04年
30	山梨県	オツカドボウ、アワボヒエボ (削りかけなし)	ヌルデ(フシノキ/オツカドノキ)	直径10~15センチ	日陰のほうに勝手に生え、年数たつと枯れてしまう	成長が早い。能無しの木で役に立たない。燃しても爆ぜる。ツクリモノにだけ使う。柔らかく粘りがある、削りやすい。芯があるののでハナを挿すのが楽	1月2日のヤメリ(山入)で伐る。役に立たない木でないののでこの山でも伐採可能	—	02年
31		ハナとダイノコ	ヌルデ(アーボノキ)	10年~12、3年生	工事や山崩れ等で荒れた土によく生える	急に行ってもいけないので事前にめぼしをつけておく 役に立たない木なので、アーボだけでは他所の山でも黙って採ってきてよい	—	—	03年
32	三重県	モチゾエ	アカメガシワ(カシワ)	—	畑の脇など、どこにでもすぐに生えてくる	軽い安物の木、焚いても力がない。かつて材は卒塔婆に利用、赤い葉柄は盆に供える著しした。皮がすつと剥ける木	—	—	07年

33	伊集院町 上土橋	ケズイカケ	ネコヤナギ (インノゴジュ)	直径1 ^ダ	家のすぐ近くに植えていた	—	特に決まりなし。乾燥させない で削る	最近見かけなくなった	05 年
34	伊集院町 清藤	ケズリカケ	ネコヤナギ	—	田に流れ込む小川によく生えた。門 の鉢植えのところで、畑に植え替えて翌年 の材とする	根付のよい木	家の庭にあるので特に伐る日 は決まっていない	—	05 年
35	鹿 児 島 県 串木野市 羽島	ケズリカケ、 ハラメ樺、箸 ナレナレ樺	ネコヤナギ イヌビワ (タブ)	元をケズリカ ケ、中をハラメ 樺、ウラを箸 に。ケズリカケ 部分で直径1 〜2 ^ダ 直径1〜2 ^ダ	川べりにずーっとあった	毒がないので箸に適している。枝がなくスーッと 伸びるし、他のどの木よりも削りやすい。柔ら かい。炙ると油が出てきて薬になるのでハシを 保存しておいた。	伐採日は特に決まりないが、ナ ンカぞ(七日節句)に採りに いった	今は農薬の関係なのか、木がな い	05 年
36	西之表市 伊関	ヒダリマキ (削りかけなし)	イヌビワ (タブ)	小指ぐらいの 太さのもの	山、道路ぶちにも生える 伐ると株木になつてたくさん生えてく る。	イチジクのような実が成る	自分の都合で伐りに行く 山仕事の合間に適材を見つ けておく	—	05 年

※市町村名は、調査当時のものを使用した



写真1: キブシのハナ (左) と
ミズキのハナ
(東秩父村公民館)
写真2: 木のシン (髓)

あるいは削りやすいといった認識も、ミズキ、ヌルデ、ニワトコ、コシアブラ、ヤナギ類、ホオノキなどについて語られるが、とくに細やかな削りを施すためには必要な条件であろう。こうして認識される性質と関わっていると考えられるのが木の「シン」である (写真2)。これはいわゆる茎の中央部に存在する柔細胞から成る組織 (髓・pith) のことで、宮城県仙台市で春彼岸の削り花を作る伊藤栄吉さん (大正一三年うまれ) の観察によれば、シンのある木はどれも材が柔らかいという。この部分に竹や木の枝を挿して固定することが多いため、シンのあることがその樹木の選択理由だと考えられることもある¹⁾。

こうした評価はどちらかといえば肯定的なものであるが、表裏する消極的評価として、これらを価値のない木、役に立たない木とする語りが広く聞かれることは注意すべき点である。

表ではヌルデ、コシアブラ、ニワトコ、ミズキ、アカメガシワ、ホオノキなどについて語られているが、とくにヌルデはその代表で、ヤクザな木 (事例26) や能無しの木 (事例31) などと酷評される傾向にある。役に立たないことの具体的説明としては、薪にすならないというのがどの地域でも常套句で、薪になるか否かが、樹木の最低限の有用性を判断する基準のひとつであったことがわかる。こうした評価は樹木の物理的特性の一端を反映したものとは言え、もちろん認識主体である人々の判断にすぎず、当然、これらの木を有用とみなす地域もある。たとえば山形県温海町 (現鶴岡市) 関川 (事例15) ではホオノキは重要な木で、その材も葉も重宝したという²⁾。しかしその一方で、わずか一〇分ほど車を走らせた峠向うの山北町雷 (事例12) では、ホオノキは柔らかい木で、ハウダル (と呼ばれる削りかけ) のようなものにでもしなければ何にもならない木だと語られる (木村廣さん、大正九年うまれ)。こうしたことは、役に立たないという評価が実に恣意的なもの

であることを示す好例と言える。実際、悪木の代表のようにいわれるヌルデも、虫が寄生して作られる虫こぶから採取される^{ふし}五倍子が、タンニンの原料として、医薬や媒染材、またお歯黒の原料などに重用されたことは夙に知られている³。しかしたとえばお歯黒にしても、その産地の中心は岡山、山口、愛媛、和歌山の諸県であり〔平井 一九九六 三九六〕、削りかけにヌルデを用いる地域とほとんど重ならないことは注意されるべきであろう。つまり、ここではこれらの木が実際に有用性を秘めているか否かではなく、これを用いる人々が役に立たないと口を揃えて語る点がかえって重要なのである⁴。

役に立たないという認識と相まって語られるのが、これをどこからでも採ってきてよいとする伝承と、日常の用には使わないとする伝承である。表ではコシアブラやニワトコ、ヌルデなどについて語られているが、II-二章でも触れたように、それは役に立たないからという理由によって説明される。山梨県丹波山村（事例 30）では、オッカドの木（和名ヌルデ）はどこからでも伐ってよいと言われた。年数が経つと枯れてしまう木だし、薪にしても撥ねて仕方がないので何の役にも立たず、これを伐っても誰も文句を言わなかったのだという（田中重夫さん・二〇〇三年一月当時八十五歳）。同村小袖の酒井徹雄さん（大正一一年うまれ）も重要な木でもないため小正月用にはどこから採ってきてよいと言うが、逆に日常においては昔から拾うなど教えられたという。やはり重要な木でないからというのがその理由だという。静岡市の有東木（事例 31）でも、アーボノキ（和名ヌルデ）は使い道のない能無しの木で、小正月にはどこから採ってきて文句を言われませんが、ツクリモノにだけ役立つ木だといって他に用いることはしない（宮原壮平さん、昭和八年うまれ）。

このように日常の役に立たないから小正月などにしか用いないとする語りもある一方で、より積極的に、これらを祝い事に結びつける場合もある。たとえば東秩父村皆谷（事例 27）では、ミズクサ（和名ミズキ）を何もならない、役に立たない木としながらも、一方では新宅の棟上げに際して屋根の棟木に縛りつけ、「祝いもんの木」「祝いの木」とする。先に例を出した山北町雷（事例 12）でも、ホオノキは「お祝いの木らしい」、という感覚が語られる。かつてはハウダルのほかにもホオノキで火箸を作り、元日の朝に用いた。こ

の日は鉄の火箸かじを使ってはならないとされていたからである（前出、木村さん）。峠を越えた温海町関川では、先もみたとおりホオノキは有用木であったが、「迎えものの木だけはどこでも伐ってよい」といわれ、どこから採ってきてもよいことの正当性が「祭りの木」という性格によって保障されていた（五十嵐勇喜さん、昭和一〇年うまれ）。

以上のように、樹木の材に対する語りは、白さや柔らかさ、あるいは祭りの木だという肯定的評価と、日用の役に立たない無用の木だという否定的評価のふたつが同時に存在することがわかる。

(2) 生態に関する観察

次に、これらの樹木の生態に関わる人々の観察をみていきたい。まずもって語られるのは生命力の強さに対する関心で、たとえば生長が早い、紅葉が美しいあるいは早いなどの視覚的にわかりやすい要素が語られる⁵。表のなかで生長が早いと語られているのは、ヌルデ、ミズキ、ニワトコ、ホオノキなどで、とくにニワトコやミズキは伐って放置しておいても葉や芽が出てくるほどだという⁶（事例 8・15）。関連して語られるのが、これらが一年でスッと伸びる木であるということである。とくにふさやかな幣型の削りかけを作る場合には節のない木であることが必須条件であり、ミズキなどはそうした特徴がよく認識されている。

ヤナギについては根つきがよいことも語られる。鹿児島県伊集院町清藤（事例 34）の松下節子さん（昭和五年うまれ）のお宅では、門の所に置いた鉢植えにネコヤナギ製のケズリカケとネコヤナギの芽とをセットで挿しておくが、ヤナギの芽がやがて根付くので、これを畑の隅に植え替えて翌年の材とするのだという⁷。一方ヌルデについては、その成長力や生命力の強さへの認識とは裏腹に、あまり大きく生長しないことも語られている（事例 20・21・27・30）。これはすなわち、用材とならないことを意味するといつてよい。

芽吹きが早いというのも高い共通性をもって認識される事柄である。表の事例のなかでは聞くことができなかったが、自治体史等の報告には、ニワトコ、ネコヤナギ、ヌルデな

どについて、春一番に芽吹くとする認識が東日本から九州まで広く語られている。このように樹木の生命力をとりわけて認識し、語ることは、その生命力にあやかろうとする意志へと繋がることも多い。実際、II-2章で触れたように、芽吹きが早いことを縁起のよいことと捉え、それゆえにこの木を用いるとする地域は広い。

生育場所としてはヌルデやニワトコ、アカメガシワ、イヌビワは道路の縁や開田した場所、ヤナギは河川べりや休耕田などに育つことが観察されている。また、とくにヌルデは新しく土を反した場所や荒れた場所に一番に生えることが認識されており、生命力の強さを意識させる所以のひとつとなっている（註3の『開荒須知』も参照）。これらの木よりも、もう少し山に入った場所が生息域だと語られるのがコシアブラやミズキで、これらは雑木林もしくはスギの植林地に生えるものがとくに質がよいとされる。たとえば東秩父村皆谷では、ミズキはスギ林などの、日陰でいくらか日の当たる場所に生育するものが柔らかくて適している、という。これらは皮が青っぽいのが、日向で育ったものは皮が赤く、堅いので適さない（前出、磯田さん）。ホオノキも里に近い山に豊富にみられる木と語られる。かつてはこの木の大きな葉でものを包むことも多く（註2も参照）、新潟県山北町雷（事例12）の大滝洋子さん（昭和一年うまれ）は幼い日の思い出を次のような歌に詠んだ。

「ほおぼづる ^{こした}木下にしのぶ おさなびの 母のみやげの 包みあれこれ」

ホオノキは生活に身近な、親しみのある木であった、という。

ここに登場する樹木群は、いずれも里や里山の近辺でしばしば見かける身近な木と認識されている。こうした身近さは、樹木に対する親近感を形成する基盤になったと想定されると共に、生命力の強さなどの特徴を目につきやすくさせるものであっただろう。

以上のように、これらの木々に対する語りすなわち認識としては、しなやかな生命力や材の素直さ、白さに対する評価があり、また、身近な木であることが親近感をもって語られる。またこうした肯定的評価と裏腹に日用の役に立たないという否定的評価も語られる。こうした認識から、人々と樹木とのどのような関係性を捉えることができるだろうか。ここでの焦点は関係性であるから、それは二者——すなわち人と樹木——それぞれの視点か

ら考察されるべきであろう。そこで次節では樹木の視点を生態学的知見から学ぶことで、人間－樹木の関わりをより総合的に、双方向的に理解することを試みたい。

第二節 樹木群の生態学的特性

生態学の援用ということ言えば、ここにみられるような樹種群とその神聖性については、すでに植物の「先駆性」という概念を使つての説明が試みられている。すなわち、三国信一がアカメガシワについて、渡邊三四一がヌルデについて、その神聖性の根拠の一端を先駆種のもつ生命力の旺盛さに見出しているのである⁸〔三国 二〇〇五 二五六～二五七、渡邊 二〇〇七 三一〕。事実、削りかけに用いられるような樹木には先駆性を持つ樹種が多い。そこで、ここでは先駆種という概念をひとつの手がかりにしつつも、三国や渡邊の生命力の強さへの認識という視点から、人と樹木との関係性という視点に軸足をずらしながら検証していきたい。

ここであらためて先駆種について事典をめくると、それは「大規模な攪乱の後の、競争植生がほとんどない環境下で成立する陽性の樹種」のことだという。ここに言う攪乱には山火事や地すべり、洪水などの自然災害もあれば、開拓、開墾など人為的なものも含まれる。「先駆」とは、すなわち植生の遷移系列における先駆性を指す。ある一定の空間の植生は、時間の経過とともにその空間的構造や構成種を変化させるが、その系列の初期に出現する樹種ということである。攪乱によって形成された開放地は、土壌が未発達であったり水分が不足していたりと環境的に整っていない。そこで環境に対する適応力が強く、初期成長の早い先駆性の樹種が、草本植物に次いで地表を覆うことになる。しかしこうした樹種はほかの植物に対する競争力が弱いため、やがて土壌が整い、耐陰性の強い遷移後期樹種が台頭し、極相林へと遷移していく過程で淘汰されていくことになる。

先駆種の一般的特徴としては、結実年齢が若い、大量の小さな種子を生産する、種子を広範囲に散布する、耐陰性が低い、成長、とくに初期成長が早い、材の比重が軽い、密生成立する傾向が強い、寿命が短い傾向にあることなどが挙げられるという。こうした特性

をもつ植物群は、自然状態においては林縁部においてマント群落を形成する。つまり、開放地と森林の境にマントのように生えるのであり、宮脇昭の言葉を借りれば、「自然状態では、境界領域に生育して草本植物群落に森林がくいこむ際の尖兵の役割を果たしており、島状に前進基地を作る」〔宮脇 一九七〇 一三〇〕のである。〔以上、井上ほか編 二〇〇三 一一〇～一一八、日本林業技術協会 二〇〇一 五九三、福嶋編 二〇〇五 九～一一、宮脇 一九七〇 一二九～一三二〕

さて、人間活動との関わりのなかで言えば、これらは新しく切り拓かれた土地や、そうした土地と林地との境（林縁部）、人の手が恒常的に入る明るい二次林などの生態系を好んで生える木ということになる。一般に先駆種に数えられるヌルデ、アカメガシワ、キブシ、ニワトコ、ウツギ、オニグルミなどをはじめ、ミズキ、コシアブラ、ヤナギ類など削りかけに用いられる樹木は、こうした人為的に攪乱された生態系（人為的生態系）を好み、初期成長の早い樹種が多い。このほか、沢沿いによく見られるサワグルミなども成長が早く、溪畔林の構成種のなかでは先駆的な種とされる〔高橋ほか監修 二〇〇〇 二五〕。ホオノキはブナ林などにも生えるが、東北の山村を歩くと山道の端などでもよく目にする木であり、人里近くの明るい森にも好んで生え、成長も比較的早い。

こうした生態学的知見は人々の観察の結果ともよく符合する。たとえばヌルデについては、先にみたように新しく開いた土地や荒れた土地に一番に生えるといい、また逆に深い木立では他の木に負ける、と観察される（事例 20 など）。身近な木だという感覚も生態学的に根拠のあるものであり、これらの木は、人間活動との関係に限定して言えば、たまたま生活圏の身近に生えているのではなく、むしろ人に身近な場所でこそ旺盛に生育するのである。用材とならず役に立たないというのも、比重が軽い（つまり強度がない）、寿命が短いために大きくならないという生態学的な特性が直接に関係しているといつてよい。

第三節 人々と樹木との具体的関係性 —— 人為的生態系という視点から

こうした生態学的な事実と人々の認識とのすりあわせは、人と樹木との関わりの在り方

についてのいくつかの興味深い視点を与えてくれる。まず人間の側から見れば、その生命力に対する驚嘆と崇敬以外にもこうした樹木を選ぶ合理的な理由があったということである⁹。これらは生活圏の身近に生育する木であり、生長も早いために材が比較的豊富に確保できる。しかしその材といえは軽軟であり、用材としては有用でないものが多い。さらにいえば、これらの木は雑木林や植林地などのわずかな林冠ギャップに——人間の側から言えば——勝手に生えてみるみる繁殖し、有用木の生長をも阻害しうる。たとえば埼玉県小鹿野町長留（事例 26）の笠原利雄さん（大正六年うまれ）は、オッカド（和名ヌルデ）はヤクザな木で簡単に生え、繁殖率も高い、ナラやクヌギなどの有用木の邪魔になるので伐って除きたい、なるべく絶やすようにしたい、と語る。事実、ヌルデをはじめ、ミズキ、ヤナギ、ニワトコ、コシアブラ、アカメガシワ、イヌビワなどはいずれも雑木林の除去材とされる木で、林冠ギャップ等に芽吹いて三年から五年もすれば、林の主役であるコナラなどの幼樹を凌ぐ高さに成長してくるといふ〔中川重年氏のご教示による〕。身近でありながら日常的にはあまり有用でなく、しかも生命力旺盛で一定数の確保ができる、また場合によっては林業や炭焼きの邪魔となるので除去する必要もある、そうした日常の役に立たない木を非日常の用途——祭りや儀礼に供する木として選ぶのは、いかにも合理的と言えるだろう。

また、人為的生態系を好む樹種ばかりが選ばれていることは、人為活動による自然への介入とそれに呼応する形での生態系の変化が、その選択の大前提としてあったことがわかる。ここにいう人為的生態系とは、人為による自然介入が継続的になされることによって維持される生態系のこと、たとえば縄文時代、青森県三内丸山の集落や周辺域も人為的生態系によって構成されていたことが考古学的成果から明らかになっている¹⁰。この概念に含意されているのは、自然に対する人間の働きかけを肯定的に、あるいは必然として捉える見方である。そうした視点は、たとえば第Ⅱ部一章で例を挙げたようなあらたな環境倫理を模索するうえでも、自然を人間存在から切り離して保護を訴える従来の環境倫理を超克するための、思想的核になったとみてよい。こうした考えは、近年では里山に関する

一連の研究に結実している。里山は「人間が暮らしのために絶えず干渉を加え続けてきた結果として生み出された二次的自然(半自然)」と定義づけられるが〔日本林業技術協会 二〇〇一 三四七〕、丸山徳次によれば、それはすなわち「文化としての自然」である。丸山の提唱する「里山学」においては、「里山をながく維持してきた人々の関わりと文化がどのようなものだったのかを研究し、里山的自然との新しい関わりを探求する」ことを目指すとしている〔丸山徳次ほか 二〇〇七 i〕。

さて、削りかけもこうした里山論の範疇で語るができるだろう。削りかけに用いられる樹木のほとんどは、里山のような人為的生態系を好む性質をもつからである。このことは次の二つの視点を示してくれる。第一には、自然環境と人間との継続的な関わりの中においてこれらの木が選択されたということ、第二には、そうした関係性のなかにおいて、結果的に、削りかけを祭るという精神活動も守られてきたということである。炭焼きや林業、開拓や開墾、薪炭材・刈敷・山菜・キノコの採集活動など様々な生業を通じて、人間が周囲の環境に意識的、無意識的に関与し、介入する、そのことによって人為的生態系が形成・維持され、その結果そこに進出してきた先駆性の樹木を、削りかけなどの祭りに用いる。それは、単にそこに生育しているから用いるという消極的利用に留まらず、すでにみたように、より積極的に間引きや手入れも兼ねながら利用される場合もある。「里山学」をはじめ、近年の里山論のなかにおいては、自然への人為的介入の具体的内容はもっぱら生業活動——とくに農業——との関わりにおいて説かれており¹¹、精神活動との関わりはあまり論じられてきていない。たしかに、生業による大幅な人為介入に比べれば祭りの材の採取は微力な影響であるかもしれない、また副次的なものにすぎないかもしれない。しかし、削りかけなどの小正月の祭りに用いられる樹木のうちの多くが、人為的生態系を好む種であるという事実は、人間の継続的な介入と改変された環境の維持、といった里山のサイクルに、生業活動のみならず精神活動も組みこまれていたことを示すと捉えてよい。生業活動と精神活動による生態環境への介入が入れ子細工のように噛みあいながら、総体として、また結果として、周囲の人為的生態系を維持するよう志向されていた、大局的に見

た場合にはそのように捉えることができるのではないだろうか。樹木の側に視点を移して言い換えたとすれば、祭りの木は人間（生業活動と精神活動）と山との関わりの総体のなかで良好な生育環境を獲得し、選ばれてきたといえる。

ここまで先駆種と人為的生態系という概念を用い、小正月等の削りかけの樹種群との関わりについて整理を試みたが、紀伊山地のケズリバナの材であるスギ、ヒノキについてもこれと同様の観点で捉えることができるだろう。第一には、スギやヒノキが植林というきわめて人為的な活動を通して守り育てられるものであることで、これらはより鮮明に「文化としての自然」である。また、小正月や春彼岸の削りかけが樹木の幹を使って作られることが多いのに対し、紀伊山地のスギやヒノキのケズリバナは基本的に枝を使って削られる。すなわち、いずれ枝打ちで落としてしまう不要な側枝を用いて作られるのである。日常的には用途がなく無用な部位を非日常の用途に供するという構図は、小正月の樹種群との関わりの在り方と共通する。

さて、こうした関わりの在り方は、それが希薄化し、解体寸前となっているいま、むしろ顕在化している。たとえば昨今の材不足もそのひとつであろう。削りかけに用いる材が近年手に入りにくくなったと認識されていることは表にもみえている通りであり、また全国の自治体史のなかにも散見される¹²。材不足の要因をひとつに求めることは妥当でないが、山に人の手が入らなくなり、こうした樹木の好む環境が減少傾向にあること、また行事が行なわれなくなって定期的な材の更新がなされなくなってしまったことなどは要因として挙げうる。たとえば群馬県六合村小雨ではコメゴメの木（和名不詳）でハナを作るが、市川義夫さん（昭和九年うまれ）によると、かつては炭焼きで木を伐ったため材がたくさん生育していたが、今は大きな木の下になって育たない、という。こうしたことは削りかけだけでなく、同じような性質をもつ樹種群を用いるほかの小正月行事に関しても聞かれる。たとえば群馬県六合村荷付場ではヤマックワ（ミズキ科のヤマボウシと思われるも未同定）をマユダマの木に用いるが、中沢一孝さん（昭和九年うまれ）によれば、最近はその手入れをしておらず、林間がなくなってきているために木が育たなくなっているという。

埼玉県東秩父村の皆谷でも、床の間に飾るマユダマはトリアシ（和名ヤマボウシ）の木につけるもので、炭を焼いていたときは山がきれいで木も探しやすかったがいまは見つけにくくなったという。磯田博安さん（昭和一〇年うまれ）に伺った話だが、二〇〇三年に訪ねたときにはトリアシがなく別の木を使っておられた。

行事が衰退したことも生態系の変化を招いており、秋田県角館町でボンデンコを作るロシアブラも、宮城県登米町寺池でヒガンバナを作るカワヤナギも、製作者が減ったため適度な更新が行なわれず、材が成長しすぎて使えない状態にあるという（雲然：村田武一さん、大正一四年うまれ／寺池：松坂勝夫さん、大正六年うまれ）。こうした例によって、利用することによってこそ継続的に適材を確保することができたことがわかるのである。

材の確保が難しくなった理由としてもうひとつ挙げられるのは、生活のなかで山に入ることが減り、時間をかけて適材を見つけることが困難になったことである。人々が材となる樹木を事前に見立てておいたことはすでにII-二章において触れた通りであるが、生業形態の変化と共に、日常のなかで樹木に触れる機会が減ったことが、材不足の認識を強くするもうひとつの要因であったかと考えられる。

以上の変化は、いずれも人と自然との交渉が少なくなり、関係性が変化したことに起因するものであろう。そのことは、削りかけの材となる木が選ばれる背景において、人々の生業活動と精神活動、周囲の人為的生態系とが、相互に関係しあう総体として在るべく志向されていたという事実を逆照射するものといつてよい。その関係が常にうまく機能していたか否か、またそこに価値を見いだすか否かは別としても、そこに具体的かつ実質的な関係が取り結ばれていたことをみることができるのである。

ここまで、樹種選択の背景にある樹木と人をめぐる関わりの一側面を示してきた。本章で明らかにされたのは、特定の樹種を選ぶことの合理性あるいは必然性である。くりかえせば、人々は白く柔らかいなどといった材質的な要因に加え、身近に比較的豊富にあり、かつ日常の用にはあまり用いない、「役に立たない」木のなかから、祭りの木を選択してい

る。それは、たいへん理にかなった選択理由であろう。しかし、たとえばⅡ—三章で確認したヌルデとツクリモノに見るような強固な結びつきは、そうした合理関係だけで説明することはできない。用いる樹木は材質的な点や生態学的観点からいえば、ヌルデでなくミズキやヤナギであっても本来構わないはずだからで、まして、類似の性質を備えていながら削りかけの材にはほとんど選ばれない樹木——たとえばネムノキ、クサギ、ムラサキシキブなど¹³——も数多くある。なぜそれぞれの土地でヌルデであり、ヤナギであり、ミズキでなければならなかったのか。それはもはや科学的解釈では説明のつかない、文化の領域に属する問いであろう。たとえこれらの樹木が選び採られたその原初の時において、その選択理由がきわめて合理的なものであったとしても、人々はそこに様々な意義づけをし、伝承を紡いでいくことで、これらの樹木をめぐる豊かな世界観を築きあげてきた。そこにみられるのは、より抽象的な樹木との関わりの在りかたである。そこで次節では樹木をめぐる民俗事象に眼をむけることにより、言語化されない人／自然の関わりの在りかたの一端を示し、なぜそこで特定の樹木が選ばれ続けてきたのか——削りかけというモノが生みだされたのか——を考察していきたい。

1 たとえば仙台市岩切ではコシアブラを用いて春彼岸のケズリバナを作るが、その際、シンに錘を挿して木を固定して削る。またここにツグを挿しこんで組みあわせるために、シンのあることが材の必須条件だという（伊東栄吉さん、大正一三年うまれ）。自治体史のなかにも同様の見解は散見される（たとえば〔胆沢町 一九八五 六二六〕）。なお、キブシの地域名称であるズイッポー、ズイノキは、この随が意識された名称であろう。

2 関川ではシナノキの内皮の繊維を使ったシナ織が村の特産品となっているが、このシナの織機はホオノキ材で作るといふ。またホオノキの葉は採取して塩蔵し、物を包むのに用いた。その利用は昭和三十五年頃まで行なっていたといふ（五十嵐昭二さん、昭和二年うまれ）。

3 たとえば正徳三年（一七一三年）『和漢三才図会』には「五倍子」として次のようにある。
「五倍子は塩麩子の木に生ず…山人霜降の前に採取し、蒸殺して之れを貨る…又造りて百薬煎と為す。以てて皂色を染め大いに時用を為す。」〔谷川健一ほか編 一九八〇 七〇〇〕
あるいは寛政七年（一七九五）の『開荒須知』（群馬県渋川市芝中の農書）には次のようにある。

「樗ハ甚悪木なり。所によりて薪にもきらふ。然れとも水辺山陰に生したるハ、其葉多く五倍子<ミツ>を生ず。大なる木ハ壺本にて其葉一斗より式斗に及ぶ。薬店に売又ハ染物やへ売る。是ハ山沢又は汚地の田にも沼ならず一向の廢り地へ植れハ多くふへ生長し易き木なり。是又二千もあれハ五十両は容易に収るへし」〔吉田芝溪 一九七九 一七一〕

- 4 ほかにもたとえば、伊勢原市では「ミズキは薪には切らなかったが、大山独楽（こま）の材料となったので値が良く、いい木があると伐って独楽屋に売った」という。なお、当地でダングを挿す木はコナラやカシなどでミズキを用いることは報告されていない〔伊勢原市史編集委員会 一九九七 一七五、四六六〕。

これに関連して、山田孝子はアイヌの例として次のことを指摘している。沙流・胆振地方のアイヌのうちでは、ドロノキは「ヤイ・ニ（ただの・木）」と呼ばれ、神格化もされず、「役に立たない木の象徴」となっているという。しかし北海道北東部では、ドロノキでイナウを作る地域、舟を造る地域もあるといい、材としての実用性や、利用価値が認められていることがわかる。すなわち「実用的価値は必ずしも経験的に確かめられたものとはいえず」、ドロノキの場合は「火の創造神話」において、火を生みだす代わりに魔神を生みだしてしまった「精神の悪い木」としての植物像が、「日常生活における評価を規定する場合にも認められる」例だという。こうした例から山田は、「植物の認識、植物観は彼らの世界観全体の枠組みとも切り離すことができないもの」であることを指摘している〔山田孝子 一九九四 一四四〕。

- 5 ヌルデの紅葉が早いことやその色の鮮やかさは、いくつかの近世史料にも記されている。たとえば文政年間頃の成立と推定される『佐渡誌』（田中美清著）巻五の「鹽麩子（ヌルテ、ユリテ、又コマギ）」の項には「秋ニ至リ早く紅葉シ…」とあり〔安田編 一九九九 一〇四〕、一八世紀後半の『張州雑誌』九十一には、「五倍子」の「葉ハ秋紅ヒナリ」とある〔愛知県郷土資料刊行会 一九七六 七四一〕。このことは生態学的にも跡づけられている。たとえば小林正明は「ヌルデの紅葉はヤマウルシと共に黄から赤のきれいな色で、他の植物より早いことが多い。このきれいな色になるのは10月中旬である。落葉は10月下旬から始まり、11月中旬には全部落ちる」としている〔小林 二〇〇二 八七〕。

- 6 ニワトコについては前章も参照。このほかクルミなどについても、「来る実とかけて縁起のいいものとされている。この木は一年に六尺（約一・八メートル）以上伸びる」などの認識が語られている〔林義明 一九九二 四六〕。

- 7 こうしたことは自治体史にも報告がある。たとえば大分県米水津村では「一月十五日 新しく柳の木で箸を作って使う。使い終わった箸は庭にさしておくと芽が出てくるという」としている〔米水津村誌編さん委員会 一九九〇 七二九〕。また長野県下では苗代にヤナギを立てる風習が広くみられるが、それが根付くことを吉凶とする習いが各地で報告されている。たとえば諏訪郡原村では次のようであった。

「苗間で代掻きをして蒔床を平らにならすとき、苗代田の中央に『苗ぼ』という長さ三〇センチメートルくらいの柳の小枝を三本、ほどよく間隔をとってさして置く。これが苗の一五センチメートルほどに伸びるころは白い根が生え芽が成長してくる、この新芽の勢よく伸びるか否かで苗育ちの状態を判断したといわれている」〔原村 一九九三 一〇九四〕

宮本常一は、根つきやすいことを神木の条件のひとつに数えている。たとえば「柳は挿木をしても根をおろし成長する木であった。杉もまた枝を挿しても根つきやすく、そういう木が神木としての一つの条件になっている」〔宮本 二〇〇三 二〇九〕、あるいは「つつじを水口にたてて豊作を祈ったのは、つつじはたいへん活着しやすい木であったことにも原因があるかと思う」〔同前 一九二〕などと述べている。なお、アイヌの人々もヌサに立てたヤナギが根つき、あらたに成長することを吉兆とする観方がある。これについてはI-1章の註12で触れた通りである。

- 8 三国信一は次のように述べる。

「なぜアカメガシワの葉を用いるのか。繰り返すが、調査地域においてアカメガシワは日常生活にあまり有用な植物ではない。実を食べることもなく、薪にもならない。材木としての利用も聞かない。では、どこで人々の暮らしとの接点があったのか。林将之によ

ると、アカメガシワは先駆性植物（パイオニアツリー）であるという。…（中略）…その先駆性は人々が切り開いた場所で発揮されてきたのである。真っ先に生えてきて、あっという間に樹木になる。しかも、日当たりさえ良ければやせた土でも育つ。その生育力は大いなるチカラとして認識されただろう」〔三国 二〇〇五 二五六～二五七〕

三国は、こうした驚異的な生命力に加え、葉柄の赤い色、稲穂を連想させる花など視覚的な印象が、人々をしてアカメガシワが選択させたのではないかとする。一方渡邊は、小正月のモノツクリの素材が「木肌が白く髓の柔らかい樹で、また根付きやすく成長が早い木」が多いことを挙げたうえで、「その中でヌルデが優位にあるのは、群を抜く成長力であろう」とする。また輪作を終えた焼畑地にハンノキと共にフシノキ（和名ヌルデ）を移植する例を挙げ、「休閒地における二次林の回復は安定した焼畑経営の要諦であり、それを支えたのがヌルデを代表とする先駆樹種（マント群落）であった。ましてや雑木の自然成長によって循環した古代の焼畑農耕を考えると、ヌルデの目覚ましい再生力に特別の神秘感を抱くのは、むしろ自然の成り行きであろう」と述べる。なお渡邊はこうした生命力のほかに、切り口から出る白い樹液（白膠）に呪力が認められていたことも指摘し、人々が「旺盛な繁殖力と白膠の持つ象徴性から、除災（辟邪）と再生（豊穰）の二つの呪力を認めていた」とする〔渡邊 二〇〇七 二三～三一〕。

- 9 そうした感覚は自治体史等の資料のなかにも数多く語られている。たとえば茨城県総和町では「ヌルデは木肌がきれいであり、切ってもまた枝が出てくるうえ、どこにでもあるがあまり用途がなかったため箸やマユダマを挿すのに使われた」〔総和町史編さん委員会 二〇〇五 三六六〕という。香川県白鳥町ではフシの木（ヌルデ）について次のようにいう。

「…フシの木をなぜダイコンギに使うかは、さだかではない。考えるに、この地域は、木炭の産地で、その山林の雑木はほとんど木炭原料として焼かれるのであるがこのフシの木は、木炭としての利用価値が少ないことと、フシの木幹は他の雑木の幹肌と比してややうす黒色であるため削りかけを行なった場合、削りかけの条がすっきりとうす黒色の肌色に条の白色がうき出されるからこのフシの木を選ぶことになったものと考えられる」〔白鳥町史編集委員会 一九八五 一五〇八〕（下線部引用者）

- 10 花粉分析と珪藻分析による成果が次のようにまとめられている。
「集落の形成とともにナラ類やブナからなる落葉広葉樹林が伐採され、クリの純林が形成された。それに先行して、集落形成の約 800 年前にすでに局所的にクリ林が形成されていた。縄文時代中期後半にはクリ林の縮小とトチノキ林の拡大が同時に起こった。これは、トチノキ利用文化の出現による可能性が高いことが指摘された」〔辻ほか編 二〇〇六 三〕

- 11 なかでも強調されているのは農業との関わりである。たとえば一九六〇年代に里山という言葉が再発見し、人と関わりの深い自然として概念づけた四手井綱英は、里山を「農用林」の代替語として捉え、「農家が農業を営むのに必要な物質生産に関係する林」と定義づけている〔四手井 一九九三 七五〕。そうした考え方は基本的に現在まで引き継がれているといえ、里山学を提唱する丸山徳次も「農業環境」をキーワードに里山を捉えている〔丸山徳治ほか 二〇〇七 五～一五〕。

- 12 たとえば一九八一年の静岡県御殿場市では「今はこのカツの木が少なくなっており、そのためにこの辺の家でも門入道を作る家が少なくなったとも聞いた」という〔富山 一九八一 四七〕。同県の静岡市瀬名でもヌルデについて、一九六九年の時点で「近年、この木も太いものは勿論、木そのものも減ってしまったと、土地の人達の話である」〔中川雄太郎 一九六九 三五〕とある。

- 13 これらは例外的に、あるいは代用として選択される場合があることから、材としては問題なく利用できることが証明される。